The Children of Green Knowe：「聖なる時間」の物語

川　越　ゆ　り

イギリスは古い建築物への愛着が強い国である。それは、中世の荘園領主が邸宅として建設したマナー・ハウス（manor house）が、個人の住宅のほか、スポーツ施設や宿泊施設、マンションなどの形で今なお残っていることにもよく表れている。

長い歴史をもつ場所のイメージとして、マナー・ハウスはしばしばイギリスのファンタジー作品にも登場する。『時の旅人』（*A Traveler in Time*，1939）や『トムは真夜中の庭で』（*Tom's Midnight Garden*，1957）、そして、『グリーン・ノウの子どもたち』（*The Children of Green Knowe*，1954）などが好例だろう。『時の旅人』『トムは真夜中の庭で』はタイムファンタジー（以下、TF）である。『グリーン・ノウの子どもたち』は TF ではないが、「時間」をテーマにしている点は他の二作と共通している。

この小論では、『グリーン・ノウの子どもたち』に、どのような時間の相が描かれているのかについて読み解くことを目的にしている。

論を展開する前に、簡単に著者の紹介をしておきたい。ルーシー・ボストン（Lucy M. Boston，1892－1990）は遅咲きの作家で、60歳を過ぎてから創作活動をはじめた。全６巻に渡る「グリーン・ノウ」シリーズが代表作で、『グリーン・ノウの子どもたち』（以下、『グリーン・ノウ』）はその１巻目にあたる。シリーズの舞台になっている古い館は、ケンブリッジシャーにあるボストン自身の邸宅で、1120年に建築されたマナー・ハウスがモデルになっている[(1)]。

1．過去の物語の再現

寄宿舎生活を送る少年、トーリー（Tolly）は、曾祖母のオールドノウ夫人（Mrs. Oldknow）の招待を受け、母方の一族が代々暮らすマナー・ハウスで冬休みを過ごすことになる。トーリーはそこで300年前の自分の先祖であり、1664年に大流行したペスト[(2)]で亡くなったという三人きょうだい―トービー、アレクサンダー、リネット（Toby，Alexander, Linnet）―の幻と出会う。

『時の旅人』や『トムは真夜中の庭で』などの TF では、現在と過去との交流を描くのに、タイムトラベル（時間移動）を用いる。つまり、現在に生きる主人公が何らかの方法で過去の世界にタイムトリップし、本来ならできないはずの経験をする、という展開である。一方、『グリーン・ノウ』においては、トーリーは過去に時間移動するわけではなく、あくまで自分の属する現在の時間のなかで、過去に生きた者たちと交流する。

トーリーはトービーたち三人きょうだいと二つの形で交流している。ひとつは、館にひとりでいるときに現れる、彼らの幻と遊ぶことで。もうひとつは、現在の館の所有者であるオールドノウ夫人がトーリーに語る、一族の物語を聞くことで、である。

『グリーン・ノウ』は部分的に枠物語の構造をとっており、トーリーが館で過ごす日々の出来事の間に、オールドノウ夫人の語る一族の物語が 4 話――トービーとアレクサンダー、リネットの物語が三つ、そして夫人の祖父の時代の物語がひとつ――はさまれている。優秀な語り手の例にもれず、夫人は、まるで親しい友人について語るような調子で、はるか昔に生きた先祖たちにまつわる話を語る。それは、ふだんの何気ない会話についてもあてはまる。

> ‘ Linnet always left the door open. She didn’t like to shut them[the chaffinches] in. She put crumbs of pastry and biscuit, and seeds that she gathered in the garden in the summer. The chaffinches came and went as rhwy liked, but they always built their nest in the cage in spring. She put a forked branch of hawthorn for them.‘　（p. 25）

「リネットは、いつもかごの戸をあけておいたのよ。あの子は、小鳥たちをとじこめ

るのをいやがってね。パンやビスケットのかけら、それに夏に庭でひろっておいた種なんかを、入れてやってたわ。ヒワはすきなように出たりはいったりしていたの。だけど春になると、かならずかごの中に巣をつくったわ。リネットはサンザシの枝のまたのところを、かごの中に入れてやったわ」（pp. 58－59）

上記の引用に出てくるリネットの鳥かごは、今もなお、トーリーの部屋にぶらさがっている。この館は、船長だった父親が航海のみやげに買ってきたというトービーの黒檀のネズミや、三人のおもちゃ箱など、一族の思い出が染みこんだ古いものたちであふれている。新品とは異なり、その背後には、何百年も前の持ち主の気配が濃厚に感じられる。

オールドノウ家に語り継がれる物語は、人の一生をはるかに越えて長く一族を見守ってきた館の記憶とも言い換えられるだろう。館に刻まれた記憶を物語としてトーリーに語ること、それがこの作品におけるオールドノウ夫人の役割である。その意味で、夫人は館の「声」そのものといってよい。実際、夫人が用事で留守にすると、トーリーは「このやしきで起こりそうないろんなことも、みんな出ていってしまったよう」（p. 200）に感じる。

もっとも、夫人のように物語を語りはしないが、トーリー自身も語り手特有の性質をもつ子どもである。

トーリーと老夫人の毎日は、館のここかしこに散らばった＜過去の物語＞を現在に再現する日々といってよい。トーリーは館や庭から、長い間、行方不明だった三人のおもちゃ箱の鍵や、リネットの腕輪や、トービーの愛馬、フェステのネームプレートなどを発見しては夫人に感心される。二人は、300年前にリネットがはめていた腕輪を磨き、再び金色に輝かせる。おもちゃ箱を開けて、アレクサンダーのフルートを吹く。クリスマスには一族に伝わる古風なオーナメントをツリーに飾り、ローソクの灯りで照らしだす。

こういった一連の行為はすべて、夫人が一族の物語を語ることと本質を同じにしている。語ることで過去に生きた者たちを現在によみがえらせるように、リネットの腕輪もアレクサンダーのフルートも、現在のなかで再び命を得る。二人は館に積もる時間層から過去を掘り起こし、現在によみがえらせる。そのすべてが、語り手本来の役割である「再現」に関わっている。

前述したように、TF では、主人公がタイムトリップしている間は「過去」に重きが置

かれる一方で、『グリーン・ノウ』では舞台がつねに「現在」に固定されている。トーリーとオールドノウ夫人は、さまざまな形で館に眠る過去の物語を再現している。彼らの語り手的性質が強調されていることを考えると、この作品がTFの形式に拠らなかったのはむしろ当然のことかもしれない。再現はつねに「今、ここ」で行われるものだからだ。

2．幻の子どもたちの属する時間

一族の物語や不思議な三人との交流は、トーリーに、自分がはるか過去とつながって在るのだという実感を与える。それは、過去から現在へ、現在から未来へと流れてゆく直線的な時間を生きている日常では得がたい感覚だろう。館にあふれる古いものたちは、作品中で遠い過去と現在とを結びつけ、「線」ではなく「層」としての時間を認識させるアイテムの役割をはたしている[3]。

もっとも、グリーン・ノウでトーリーが出会う三人は、TFの主人公がタイムトリップした過去で出会う人々とは全く異なる。当然ながら、現在の館に現れる三人は、300年前に生きていた頃の彼らではないからだ。

トービー、アレクサンダー、リネットは、ペストで死んでからもなお、守護天使のような不思議な存在として現在の館にとどまっている。だからこそ、三人は、自分たちがペストで亡くなったときの様子をトーリーに語ったり、後述するように、自分たちよりはるか後の時代に起こったブラック・ファーディの事件について、トーリーに警告したりすることもできる。

そうなると、三人との交流を通してトーリーが経験するのは、自分の存在が過去とつながって在るという感覚の回復にとどまらない。そもそも、三人の子どもはどのような時空間に属しているのだろうか。

トーリーが三人と初めて大きく接近する場面では、前日から降っていた雪がやみ、「外の世界は、すっかり魔法にかかって」（p. 140）いるようにみえる。作品中で頻繁にくり返される雪の描写は、単に雰囲気を高めるためだけのものではない。雪は三人と、ひいては三人の属する時間と密に関わっている。

すっぽりと雪に覆われ白一色になった館は、日常の時間からすっかり切り離された印象

を与える。館を流れる日常の時間は凍結し、その奥から別の時間が立ち現れる。三人に接近する前からすでに、館は彼らの属する時空間に変容している。

庭をひとりで歩くうちに、トーリーはイチイの木の枝に雪が覆いかぶさってできたかまくらを見つける。

> Inside was a high, tent-shaped room with branches for beams and rafters, lit with a shadow less opal light through the snow walls. In the centre, leaning against the bole of the tree, were Toby and Alexander, with little Linnet sitting on the dry yew-needle carpet at their feet. It was Alexander of course who was playing, while a red squirrel ran up down him, searching in his pockets for nuts.（pp. 66－77）
>
> 中にはいると、枝が梁やたる木のように張って、高いテントのような形のへやになり、雪の壁をすかして、明るいオパール色の光がさしこんでいた。そのまん中に、幹にもたれて、トービーとアレクサンダーがいた。リネットは、ふたりの足もとのイチイの枯れ葉のじゅうたんの上に、すわっていた。フルートをふいているのは、もちろんアレクサンダーだった。かれがフルートをふいているあいだに、赤い小リスがそのからだをかけあがったりおりたりして、ポケットの木の実をさがしていた。（pp. 144－145）

三人の属する内密の空間のイメージとしての雪のかまくらで、トーリーは、それまでは気配しか残さなかったきょうだいの姿を初めて目にし、彼らの会話を聞く。

オールドノウ夫人は、トーリーに、かつて自分が子どもだった頃、三人とよく遊んだことを話す。トービーとアレクサンダーとリネットは、日常を流れる時の支配の外側で生きている。今や＜永遠の子ども＞となった彼らは、死ぬこともなければ年をとることもない。彼らにとっては過去も未来もなく、永遠に館での現在がくり返されている。トーリーが三人との不思議な交流を通して経験するのは、時計で測ることのできない、永遠の現在とでもいうべき非日常的な時間である。

3．永遠の現在と語りの時間

ところで、永遠の現在が時計では測れない非日常的時間であるなら、オールドノウ夫人が一族の物語を語る時間もまた、永遠の現在に属しているとはいえないだろうか。

前述のように、語り手の役割は、過去の物語を現在に再現することにある。オールドノウ家では、一族にまつわる物語が代々語り継がれてきた。

夫人の祖父の時代に起きたという「ブラック・ファーディの話」では、トービーの愛馬、フェステの幻が、ブラック・ファーディという馬盗人をこらしめる。また、「リネットの話」では、リネットが、館の庭に置かれた聖クリストファーの石像が、教会に祈りに出かける姿を目撃する。

つまり、オールドノウ家に伝わるこれらの物語は、聖なる力に守護された館の物語であり、一族のパーソナルな伝説である。何百年に渡る歴史のなか、一族の間で語られるたびに、それらはその時々の「今、ここ」に再現されてきた。

では、語りを通してくり返され、その時々の「今、ここ」に再現される時間とは、どういう時間なのか。宗教学者のエリアーデ（Eliade, Mircea）は、周期的にくり返される種類の時間について、以下のように言及している。

> 宗教でも呪術でも、周期性は何よりも、現在化された神話的時間を無際限に利用することを意味する。儀礼はすべて、今、この瞬間におこなわれる、という特質をもっている。その儀礼によって出来事が記念され、くりかえされる際の時間は、現在化され、たとえその時間がいかに遠い過去と考えられても、それはいわば「再＝現」re-presente されるのである。キリストの受難と死と復活は、単に聖週（復活節前の週）の祭式によって記念されるだけではなく、それらはその時、実際に、信徒の前で起こるのである。真のキリスト教徒は、自分がこうした超歴史的な出来事の同時代人であると感じなければならない[(4)]。（傍線は筆者による）

もちろん、語りは宗教や呪術ではなく、ドメスティックな場に根ざす行為である。しか

し、「今、この瞬間におこなわれる」という性質や、周期的ではないが「くり返される際の時間」である点は共通している。

三人の子どもの物語が語られるたびに、300年前の出来事が、今、ここに再生され（つまり、「現在化」され)、史実を超えた「超歴史的な出来事」となる。夫人の話を聞きながら、トーリーは自分が三人の子どもと「同時代人」であるかのような感覚を抱く。その意味では、語りも日常化された儀式の一種であるといえるだろう。

オールドノウ夫人の語りの時間も、グリーン・ノウに現れる三人の属する時間も、エリアーデのいうところの「聖なる時間」につながっている。一族の物語が語られることで、そして、幻の三人と交流することで、グリーン・ノウでは日常の流れる時間と並行して「聖なる時間」が生きられている。それは、作品のクライマックスでもっとも顕著にあらわれる。

4．聖なる時間の物語

グリーン・ノウで日々を過ごすうちに、トーリーは「ブラック・ファーディの話」に続きがあったことを知る。馬盗人のブラック・ファーディが捕まったあと、彼の母親が、館の庭にあるノアをかたどった大きな木に呪いをかけ、今なお呪いは解けていないのだという。ノアの木に注意しろという三人の警告を忘れ、トーリーはノアの木に近づき、挑発するかのような歌をうたう。

ある晩、夜の庭にひとりで出たトーリーは、思いがけない場所で、自分を待ち受けていたように立ちはだかるノアの木とぶつかる。

> Then there came a flash of lightning in which the whole scene was clearer than the sharpest thought. By its terrible flicker Tolly saw in the middle of the lawn a tree where no tree should be-a tree shaped roughly like a stooping man, that waved its arms before it and clutched the air with its long fingers. In tha clap of thunder which followed, Tolly, frozen with terror, raised his thin child’s voice in screams of ‘ Linnet! Linnet! ‘
>
> Perhaps he had no need to call, for as the thunder died away in distant precipices of sky,

Linnet’s voice like an anxious bird was beating the air, calling : ‘St Christopher, St Christopher, come quickly, St Christopher! ‘

Other voices joined hers, Toby’s and Alexander’s, piercing and boyish, and other unknown children’s.（pp. 105－107）

そのとき、いなずまがさっときらめき、あたりがぱっと照らしだされた。そのおそろしいきらめきの中で、木なんぞあるはずのない芝生のまん中に、一本の木が立っているのが見えた。まえかがみになった人間の形をし、両手をまえにつき出し、長い指で空中をかきむしるようなかっこうで立っている。つづいてかみなりが鳴った。トーリーは、おそろしさでぞっとし、細い子どもの声で、かん高く、「リネット！　リネット！」とさけんだ。

たぶん、リネットをよぶ必要はなかっただろう。かみなりが遠く天のはてに消えさったころ、リネットの声が、不安にふるえる小鳥のように、空中にひびいた。

「聖クリストファーさま、聖クリストファーさま、早くきて、聖クリストファーさま！」

ほかの声もくわわった。男の子らしい、するどいトービーとアレクサンダーの声。それからさらに、知らない子どもたちの声。（pp. 227－228）

つぎの瞬間、大きな稲妻が落ち、ノアの木は燃え上がる。

この場面で、トーリーは、三人の子ども（そして、館にかつて生きた多くの子どもたち）と共に、呪いが砕かれる瞬間を目撃する。重要なのは、「ブラック・ファーディの話」が、トーリーの生きている現在の時間のなかで完結することである。一族の伝説の時間がトーリーの現実の時間と結びつき、新たな物語が生まれる。トーリーは三人の子どもと共に、一族の伝説の登場人物になる。

翌日、トーリーとオールドノウ夫人はクリスマスのミサに出かける。月明かりの照らす道を歩く様子は「巡礼」にたとえられ、「ふしぎな、楽しい、家族のあつまりになる」（p. 240）という予感どおり、ミサの間、夢うつつのなかで、トーリーは三人と彼らの母親、そして、教会の壁にもたれてひっそり礼拝する聖クリストファーの姿を見いだす。クリスマスのミサとはいえ、この場面は特定の宗教を超えた至福感に包まれている。それは

現在の時間と聖なる時間とが溶け合っているありようから生まれるものだろう。

館での不思議な経験を通して、トーリーの中で、「個」のレベルを超えて受け継がれてきたアイデンティティが開かれ、自分が過去とつながって在るという感覚を得たことは、作品の重要なテーマのひとつにはちがいない。

しかし、それ以上に、ボストンがこの世の時間枠の外に生きる三人とトーリーとの交流を通して描きたかったのは、「現在」という時間のありよう、一見、直線的に流れているように見えながら、つねに聖なる時間に開かれる可能性をもつ時間としての「現在」ではないだろうか。『グリーン・ノウ』は、エリアーデの以下のことばと同質の経験を物語の形式で語ったファンタジーといえるだろう：「いかなる時間も、聖なる時間に対して、「開かれて」おり、換言すれば、どんな時間も、適切な表現で絶対と呼んでいるものを、つまり、超自然的、超人間的、超歴史的なものを啓示することができるのである。」[(5)]

使用テキスト

Lucy M. Boston, *The Children of Green Knowe,* Faber and Faber, 2000.

（『グリーン・ノウ物語１　グリーン・ノウの子どもたち』亀井俊介訳　評論社　2008年）

注

(1)　ボストンの自宅は、イギリスでも最古のマナー・ハウスのひとつとされている。ボストンの死後は息子夫婦が継ぎ、一般公開もされている。

(2)　“the Great Plague in London”のこと。1664年～1665年にかけて大流行し、ロンドンの人口の５分の１が死亡したといわれる。

(3)　TF においては、主人公が過去の世界で見たものと現在の時間のなかで再会するという場面がよく見られる。このような場面も、現在と過去のむすびつけの感覚を読者に与える効果がある。

(4)　ミルチャ・エリアーデ『エリアーデ著作集第三巻　聖なる時間と空間』（久米博訳

せりか書房　1974年）p.94.

(5)　前掲　p.89